

第六十八回県俳句大会選考結果

特別選 「当季雑詠」

【評】何とも言えない間合いと表現の仕方に共鳴する。

黒田 杏子 氏 選

◎秀 逸（5句）

山の地図見る秋風に石を乗せ

青 森 前田 良三

歳月のひと日消えゆく花木檜

青 森 橘川まもる

炎には炎のかたち送り盆

青 森 井手上省子

野分明け清き泥水雲写し

青 森 高森ましら

眠りたくなくも寝に就く良夜かな

青 森 宮川 雅子

風鈴の秋の音色となりけり

八 戸 西川 無行

底上げの長持に入れ実梅売る

む つ 萬年 和子

巻紙に新しき筆秋涼し

五所川原 櫛引 麗子

幼子の産毛を剃って秋澄みぬ

八 戸 磯沼 チヨ

敗戦忌をずっとならべて八月くる

青 森 徳才子青良

新涼や取れ立ての貝売りてゆく

青 森 千葉 敏

かなかなやだあれも居ない家二軒

青 森 橘川まもる

◎天 位

あの里に息子が居ます稲光

平 内 船橋 久枝

【評】季語が一句を貫いている。自然を模写した

だけでなく人と人、家族の絆を伝えている。

◎地 位

林檎売りひと日あかるき場所にゐて

おいらせ 野村 英利

【評】ほっとする光景を想像させる。俳句の形式

にとらわれていない自由自在さもよい。

◎人 位

此の世去る日の無しとせず髪洗ふ

七 戸 福田 露幸

雲の峰父の通りし道を行く

十和田 佐々木寿子

肝心の言葉忘るる暑さかな

十和田 中村しおん

◎佳 作（20句）

林檎の香満ちて教室新しき

弘 前 畠山 容子

いなびかり山の崩るる夢に覚め

平 川 西谷 是空

三日月にぴよんと乗りたい夜もある

弘 前 鈴木とまと

虫の音のかむさり止まぬ千空碑

弘 前 笹原 郁子

山の地図見る秋風に石を乗せ

青 森 前田 良三

◎秀 逸（5句）

炎には炎のかたち送り盆

青 森 井手上省子

野分明け清き泥水雲写し

青 森 高森ましら

眠りたくなくも寝に就く良夜かな

青 森 宮川 雅子

風鈴の秋の音色となりけり

八 戸 西川 無行

底上げの長持に入れ実梅売る

む つ 萬年 和子

巻紙に新しき筆秋涼し

五所川原 櫛引 麗子

幼子の産毛を剃って秋澄みぬ

八 戸 磯沼 チヨ

敗戦忌をずっとならべて八月くる

青 森 徳才子青良

新涼や取れ立ての貝売りてゆく

青 森 千葉 敏

かなかなやだあれも居ない家二軒

青 森 橘川まもる

特別選「当季雑詠」

身を放つたとへば霧の八甲田

青森

島田よう子

霊峰に破邪と叫びぬ御来光

青森

布施 協一

秋の夜や真意ぼかして書く日記

八戸

黒田 長子

遺りたる小さな指輪夜の秋

青森

山田のぶ子

岬馬や音あるごとく霧流れ

八戸

田端 千鼓

山の子の露を飛ばして登校す

五戸

鈴木志美恵

露の世のひとりひとりのひとひかな

弘前

坂本 幽弦

宿題「鯖」

◎佳 作(15句)

八戸 古川 恵理

塩ふってごま鯖の胡麻浮き立たす

八戸 佐藤 幸子

波状紋は鯖潜り来し潮の道

弘前 高野万津江

トロ箱の鯖醒め遣らぬ海の夢

七戸 高田美津子

真鯖煮る泡立つ波の音立てて

深浦 蒲田 吟竜

「ねえさん」と呼ばれて鯖を買はさるる

八戸 磯沼 チヨ

鉢巻を振り直して鯖捌く

青森 埜 ひさ

鯖鮓やいざ包丁を研ぎ直す

弘前 はしもと棒

松宮 梗子 / 吉田千嘉子

鯖を食べしたたかに生き一人なり

(以上、十二氏共同選)

五所川原 齋藤今日子

鯖食うて稼ぎ盛りと豪語せり

五所川原 松宮 梗子

凱旋のごと鯖船の戻りけり

十和田 中村しおん

後藤岑生氏選

◎推 薦(5句)

鳥やまは海からの手紙鯖を追う

◎推 薦(5句)

復興す八戸沖の鯖火かな

青森 工藤 邦子

白粥にほぐす母への鯖味噌煮

青森 徳才子青良

俎板の鯖の目にまだ力あり

八戸 古川 恵理

前沖の大いなる闇鯖火燃ゆ

八戸 小笠原聖子

もてなしの鯖一本の重さかな

弘前 木村あさ子

トロ箱の鯖醒め遣らぬ海の夢

七戸 高田美津子

海と生き津波と生きて大鯖火

青森 敦賀 恵子

ノルウェイの鯖津軽野の風に干す

おいらせ 野村 英利

釣り上げし鯖蒼天を泳ぎけり

青森 村山 いう

鯖を釣る孫はいつしか漁師の眼

青森 大澤 映城

流紋のぴんと張りたる鯖を買ふ

青森 下山みのる

鯖ねたに残る流紋海の色

弘前 小田桐素人

宿題「鯖」

俎板の鯖の目にまだ力あり

十和田 下山 延子

鯖の背に匂の青さや塩を打つ

宿題「鯖」

◎佳 作(15句)

朝市や鯖のぎらりと海の色

藤崎 清水 雪江

真鯖煮る泡立つ波の音立てて

青森 今野 三郎

水揚げの鯖の纏ひし海の色

深浦 蒲田 吟竜

鳥やまは海からの手紙鯖を追う

十和田 佐々木寿子

海と生き津波と生きて大鯖火

青森 徳才子青良

うるむ眼は海恋ふ故か鯖青し

青森 関 礼子

子の未来広がる鯖の大漁旗

十和田 佃 正子

秋鯖のまなこに海の水たまり

五所川原 成田みどり

前沖の藍を深めて鯖しめる

五所川原 葛西 幸子

闇深め沖の鯖火の揃ひけり

八戸 三ヶ森青雲

定年やゆつくりゆつたり小鯖釣る

むつ 畑中 月穂

前沖の鯖の一念青光り

青森 島田よう子

群青のうねり膨らみ鯖来たる

青森 浜田しげる

焼鯖にけぶり潮の香朝の市

階上 伊藤 幻人

店頭の鯖まるくくと青光り

青森 鈴木 幸子

畑中とほる氏選

◎推 薦(5句)

鯖火燃ゆ旅の眠りの覚めやすく

弘前 今田とみを

それとなく語る老後や鯖を買ふ

弘前 工藤乃里子

群青のうねり膨らみ鯖来たる

青森 浜田しげる

海峡を鯖船戻る夜明けかな

青森 布施 協一

蝦夷見えて鯖火の揺るる夜明かな

◎佳 作(15句)

ひとりだけ鯖の刺身にあたりたる

むつ 飯田 知克

復興の兆しか沖に鯖火もゆ

むつ 杉山 畝女

鉢巻を振り直して鯖捌く

青森 塙 ひさ

荷こぼれの鯖を狙ふやごめの群

青森 柏原 昭三

前沖の大いなる闇鯖火燃ゆ

八戸 小笠原聖子

鯖を焼く主婦の座にある月日かな

青森 斎藤 みさ

青鯖を釣りて埠頭の昼の月

弘前 小田桐耕風

一つまた一つ鯖火の沖に殖ゆ

八戸 木附沢麦青

空と海のははひを焦がす鯖火かな

むつ 萬年 和子

鯖を耀る津軽訛の魚市場

青森 白鳥 光雄

闇深め沖の鯖火の揃ひけり

八戸 三ヶ森青雲

星消せる遠流の島や鯖火もゆ

板柳 くどうひろこ

蝦夷見えて鯖火の揺るる夜明かな

むつ 相馬 禮子

往年の鯖街道や獣道

黒石 三上 忠英

鯖漁の出船の岸の女声

十和田 小林 五月

西谷是空氏選

◎推 薦(5句)

鯖火燃ゆ旅の眠りの覚めやすく

弘前 今田とみを

空と海のあはひを焦がす鯖火かな

むつ 万年 和子

鯖食うて貧しき貌の笑ひけり

弘前 石崎 志亥

釣り上げし鯖蒼天を泳ぎけり

青森 村山 いう

ひとすぢの翡翠色なる鯖捌く

◎佳 作(15句)

秋鯖の腹白々と策の上

弘前 佐藤いく子

鯖鮓や津軽にのこる京訛

青森 前田 良三

一家息災こつてり鯖を味噌煮して

板柳 太田 鉄杉

漁火を見つむる鯖の一夜干

青森 太田 直樹

うるむ眼は海恋ふ故か鯖青し

青森 関 礼子

鯖煮るや辛き津軽の酒入れて

弘前 桜庭 門九

目を開けて売らるる鯖の海の色

五戸 米沢忍冬花

鯖漁の吃水深き船帰る

八戸 西川 無行

鯖旨し内心恐る蕁麻疹

むつ 高橋千夜湖

嫁してより愚知聞き上手鯖を割く

五所川原 櫛引 麗子

定年やゆつくりゆつたり小鯖釣る

むつ 畑中 月穂

焼き鯖の皿はみ出せる火照りかな

弘前 畠山 容子

七輪の鯖が客呼ぶ横丁かな

八戸 黒田 長子

一振りには能登の浜塩秋の鯖

八戸 小泉 静子

鯖漁の出船の岸の女声

十和田 小林 五月

三ヶ森青雲氏選

◎推 薦(5句)

何は扱措き鯖の味噌煮と地酒かな

弘前 桜庭 恵

海と生き津波と生きて大鯖火

青森 敦賀 恵子

もてなしの鯖一本の重さかな

おいらせ 野村 英利

海峡の夜ごとに灯る鯖火かな

青森 高谷 閑水

七輪の鯖が客呼ぶ横丁かな

宿題「鯖」

宿題「鯖」

◎佳 作(15句)

復興の兆しか沖に鯖火もゆ

八戸 黒田 長子

むつ 杉山 畝女

なにごともし過ぎ去る一と日鯖を焼く

青森 杉田 美峰

鯖釣りし愛用の竿のこしけり

青森 石戸 キコ

一家息災こつてり鯖を味噌煮して

板柳 太田 鉄杉

前沖の大いなる闇鯖火燃ゆ

八戸 小笠原聖子

凱旋のごと鯖船の戻りけり

十和田 中村しおん

鯖を焼く主婦の座にある月日かな

青森 斎藤 みさ

大漁の鯖にエンジン全開す

八戸 今 順子

一つまた一つ鯖火の沖に殖ゆ

八戸 木附沢麦青

鯖おろす俎の傷亡母のもの

青森 青山 弘子

鯖一本目の炯炯を購へり

青森 長島 喜美

俎板の鯖の目にまだ力あり

八戸 古川 恵理

空と海のあはひを焦がす鯖火かな

むつ 萬年 和子

前沖の闇を焦して鯖火燃ゆ

八戸 小野寺和子

今生の終の旅かも鯖火視る

七戸 福田 露幸

吉田紅一氏選

◎推 薦(5句)

波状紋は鯖潜り来し潮の道

弘前 高野万津江

悠然と矢の如き縞鯖群れて

弘前 鈴木英二郎

鯖を釣る孫はいつしか漁師の眼

青森 大澤 映城

捕れたてはメタリックブルー鯖料る

八戸 山下 節子

鯖好きの妻の健啖見て飽かず

青森 山口せつ子

◎佳 作(15句)

何は扱措き鯖の味噌煮と地酒かな

八戸 郡川 宏一

弘前 桜庭 恵

朝市や鯖のざらりと海の色

青森 今野 三郎

水揚げの鯖の纏ひし海の色

十和田 佐々木寿子

船上より拌む蕪島鯖大漁

平川 西谷 是空

ノルウェイの鯖津軽野の風に干す

青森 下山みのる

鯖の上鯖が飛び交ふ光り合ひ

弘前 伊東 一升

鯖食うてぼろりと罪を吐きしかな

青森 齊藤 君子

嫁してより愚知聞き上手鯖を割く

五所川原 櫛引 麗子

ひばにのせ浜焼き鯖をいただきぬ

弘前 鎌田美正子

鯖を裂く庖丁の刃の青光り

青森 山口せつ子

鯖食うて貧しき貌の笑ひけり

弘前 石崎 志亥

鯖食うて稼ぎ盛りと豪語せり

五所川原 松宮 梗子

鯖の背に旬の青さや塩を打つ

藤崎 清水 雪江

店頭の鯖まろくと青光り

青森 鈴木 幸子

ひとすぢの翡翠色なる鯖捌く

青森 丹場 節子

高橋千恵氏選

◎推 薦 (5句)

朝市や鯖のぎらりと海の色

青森 今野 三郎

夫の郷漁師どころや鯖光る

青森 工藤 宣子

白粥にほぐす母への鯖味噌煮

弘前 木村あさ子

空と海のあはひを焦がす鯖火かな

むつ 萬年 和子

復興の糶のト口箱鯖光る

十和田 沼山 虹雨

包丁に吸ひつく腹の太き鯖

弘前 吉田 紅一

十和田 稲場 暁子

◎佳 作 (15句)

鯖火燃ゆ旅の眠りの覚めやすく

弘前 今田とみを

鯖を焼く主婦の座にある月日かな

青森 斎藤 みさ

鯖下ろす脂の乗りを話しては

八戸 高橋 秀東

鯖を釣る孫はいつしか漁師の眼

青森 大澤 映城

朝釣りの鯖手掴みで分けくれし

青森 木村 秋湖

一つまた一つ鯖火の沖に殖ゆ

八戸 木附沢麦青

鯖漁の吃水深き船帰る

八戸 西川 無行

鯖船の沖へ沖へと水脈のぼす

八戸 山谷 文子

鯖の上鯖が飛び交ふ光り合ひ

弘前 伊東 一升

海峡に星と鯖火の数競ふ

弘前 伊東 一升

定番の鯖の味噌煮や漁師妻

八戸 佐々木雅翔

塩ふってごま鯖の胡麻浮き立たす

八戸 佐藤 幸子

釣り上げし鯖蒼天を泳ぎけり

青森 村山 いう

蝦夷見えて鯖火の揺るる夜明かな

むつ 相馬 禮子

鯖漁の出船の岸の女声

十和田 小林 五月

敦賀恵子氏選

◎推 薦 (5句)

波状紋は鯖潜り来し潮の道

弘前 高野万津江

島国に不戦の誓ひ鯖火燃ゆ

青森 佐々木一湖

ノルウェイの鯖津軽野の風に干す

青森 下山みのる

鯖の旬食はず嫌ひを重ねをり

弘前 吉田 紅一

宿題「鯖」

宿題「鯖」

◎佳 作(15句)

真鯖煮る泡立つ波の音立てて

弘前 秋山 範子

深浦 蒲田 吟竜

鯖火燃ゆ金華山沖街のごと

青森 中島 五郎

なにごともし過ぎ去る一と日鯖を焼く

青森 杉田 美峰

黒潮の刻印あをく鯖奔る

平川 後藤 朋子

三陸を見てきし鯖の目と思ふ

十和田 日野口 晃

水揚げの鯖走らせて手の老いし

平内 船橋 久枝

うるむ眼は海恋ふ故か鯖青し

青森 関 礼子

鯖の背の波の模様を切り分ける

青森 秋元エミ子

鯖おろす俎の傷亡母のもの

青森 青山 弘子

流紋のぴんと張りたる鯖を買ふ

十和田 下山 延子

鯖干して青青と光る家紋かな

弘前 富士 野菊

塩ふつてごま鯖の胡麻浮き立たす

八戸 佐藤 幸子

定年やゆつくりゆつたり小鯖釣る

むつ 畑中 月穂

地の鯖に指押し返す張りのあり

弘前 対馬 迪女

トラックのゆさゆされと揺れ鯖を積む

八戸 田端 千鼓

関礼子氏選

◎推 薦(5句)

復興の兆しか沖に鯖火もゆ

むつ 杉山 畝女

朝釣りの鯖手掴みで分けくれし

青森 木村 秋湖

鯖一本目の炯炯を購へり

青森 長島 喜美

海峡に星と鯖火の数競ふ

十和田 沼山 虹雨

ト口箱の鯖醒め遣らぬ海の夢

青森 宮崎 明子

◎佳 作(15句)

朝市や鯖のぎらりと海の色

七戸 高田美津子

青森 今野 三郎

五十集屋に前沖鯖を焼く煙

弘前 笹原 郁子

荷こぼれの鯖を狙ふやごめの群

青森 柏原 昭三

前沖の大いなる闇鯖火燃ゆ

八戸 小笠原聖子

大漁の鯖にエンジン全開す

八戸 今 順子

白粥にほぐす母への鯖味噌煮

弘前 木村あさ子

鯖の背の波の模様を切り分ける

青森 秋元エミ子

一つまた一つ鯖火の沖に殖ゆ

八戸 木附沢麦青

ノルウェイの鯖津軽野の風に干す

青森 下山みのる

釣り上げし小鯖バケツを泳ぎけり

青森 宮崎 明子

復興の糶のト口箱鯖光る

十和田 稲場 暁子

鯖の旬食はず嫌ひを重ねをり

弘前 吉田 紅一

定年やゆつくりゆつたり小鯖釣る

むつ 畑中 月穂

鯖跳ねて積まれて浜のキラキラす

弘前 花田 晶子

鯖の背に旬の青さや塩を打つ

藤崎 清水 雪江

青森 浜田しげる

◎佳 作(15句)

波状紋は鯖潜り来し潮の道

弘前 高野万津江

復興の兆しか沖に鯖火もゆ

むつ 杉山 畝女

鳥やまは海からの手紙鯖を追う

青森 徳才子青良

島国に不戦の誓ひ鯖火燃ゆ

青森 佐々木一湖

はにかみて鯖の味噌煮といふ少女

野辺地 後藤 瑞江

鯖煮るや辛き津軽の酒入れて

弘前 桜庭 門九

それぞれにちがふ海持ち鯖売らる

弘前 竹浪 克夫

鯖漁の吃水深き船帰る

八戸 西川 無行

鯖火燃へ青く横たふ蝦夷の島

むつ 畑中とほる

流紋のぴんと張りたる鯖を買ふ

十和田 下山 延子

回遊の鯖に寄り来る群れ鵜

八戸 鈴木 莉花

ことさらに夫思う日よ鯖を買う

青森 大平恵美子

潮焼けは漢の勲章鯖を釣る

青森 榊 せい子

釣り上げし鯖蒼天を泳ぎけり

青森 村山 いう

ひとすぢの翡翠色なる鯖捌く

青森 丹場 節子

松宮梗子氏選

◎推 薦(5句)

船上より拌む蕪島鯖大漁

平川 西谷 是空

凱旋のごと鯖船の戻りけり

十和田 中村しおん

白粥にほぐす母への鯖味噌煮

弘前 木村あさ子

黒潮の匂ひも新ラの鯖料る

八戸 小林 凡石

鯖豊漁かもめ出迎ふ港かな

山下節子氏選

◎推 薦(5句)

荷こぼれの鯖を狙ふやごめの群

青森 柏原 昭三

凱旋のごと鯖船の戻りけり

十和田 中村しおん

朝釣りの鯖手掴みで分けくれし

青森 木村 秋湖

母遠し鯖の味噌煮もその味も

青森 小杉 智子

群青のうねり膨らみ鯖来たる

◎佳 作(15句)

復興す八戸沖の鯖火かな

青森 工藤 邦子

裾分けし日本海の色の鯖

深浦 草野 力丸

警報の解除となりて鯖を食ふ

鯡ヶ沢 南 美智子

鯖を焼く主婦の座にある月日かな

青森 斎藤 みさ

鯖下ろす脂の乗りを話しては

八戸 高橋 秀東

朝市のどら声飛び交ふ荷揚げ鯖

弘前 藤井 芳子

鯖を煮る鼻唄加減味噌加減

青森 高森ましら

釣り上げし小鯖バケツを泳ぎけり

青森 宮崎 明子

俎板の鯖の目にまだ力あり

八戸 古川 恵理

流紋のぴんと張りたる鯖を買ふ

十和田 下山 延子

ひばにのせ浜焼き鯖をいただきぬ

弘前 鎌田美正子

復興の糶のトロ箱鯖光る

十和田 稲場 暁子

潮焼けは漢の勲章鯖を釣る

青森 榊 せい子

締め鯖に納得の箸つかひけり

八戸 吉田 敏夫

群青のうねり膨らみ鯖来たる

青森 浜田しげる

吉田千嘉子氏選

◎推 薦(5句)

糶の声一際高し鯖は旬

青森 牧 ひろし

子ら発たせ戻る日常鯖を焼く

十和田 大川 恵子

漁火を見つむる鯖の一夜干

青森 太田 直樹

青鯖を釣りて埠頭の昼の月

弘前 小田桐耕風

鯖漁の吃水深き船帰る

弘前 桜庭 門九

◎佳 作(15句)

朝市や鯖のざらりと海の色

青森 今野 三郎

鯖鮓や津軽にのこる京訛

青森 前田 良三

鯖を食べしたたかに生き一人なり

五所川原 齋藤今日子

銀シャリに鯖の刺身でのつけ井

十和田 村松 圭治

荷こぼれの鯖を狙ふやごめの群

青森 柏原 昭三

三陸を見てきし鯖の目と思ふ

十和田 日野口 晃

凱旋のごと鯖船の戻りけり

十和田 中村しおん

白粥にほぐす母への鯖味噌煮

弘前 木村あさ子

朝釣りの鯖手掴みで分けくれし

青森 木村 秋湖

鯖煮るや辛き津軽の酒入れて

弘前 桜庭 門九

宿題「鯖」

一つまた一つ鯖火の沖に殖ゆ

八戸

木附沢麦青

鯖一本目の炯炯を購へり

青森

長島 喜美

俎板の鯖の目にまだ力あり

八戸

古川 恵理

締め鯖に納得の箸つかひけり

八戸

吉田 敏夫

鯖の背に匂の青さや塩を打つ

藤崎

清水 雪江

席題A「秋の星」

対馬 迪女 氏 選

木村 秋湖 氏 選

秋の星浜砂濡れておりにけり
青 森

宮崎 明子

ほたる族と云はるる吾に秋の星

弘 前 葛西 栄子

巫女舞の鈴鳴って終ふ秋の星

万年 和子

寝つかれず秋の星座へ迷ひこむ

五所川原 櫛引 麗子

◎佳 作(15句)

静かなる一日の終り秋の星

青 森 岡部 文子

くつきりと島の影立つ秋の星

青 森 浜田しげる

◎天 位

秋の星陸軍墓地の静寂かな

秋の星縄文土器の真上かな

青 森 千葉みちる

青 森 今泉 敏雄

◎地 位

巡視船瞬き交す秋の星

秋の星開拓跡に井戸ひとつ

十和田 大川 恵子

十和田 小林 五月

耳敏く人の振り向く秋の星

五所川原 一戸 鈴

木のぼりが上手な秋の星となる

秋の星羽黒の宿に行衣脱ぐ

青 森 徳才子青良

八 戸 佐々木ツタ子

◎人 位

半島へ伸びゆく鉄路秋の星

藤 崎 清水 雪江

青 森 大谷 和彦

◎秀 逸(5句)

病室の窓に親しき秋の星

木村秋湖氏選

山小屋を底まで包み秋の星

青 森 宮川 暢子

◎天 位

御霊屋に灯火ひとつや星月夜

星の綺羅秋の二夕夜もすぎしころ

座を組みしより光り増す秋の星

弘 前 笹原 郁子

八 戸 西川 無行

八 戸 木附沢麦青

秋の星木立洩れくる神の鈴

◎地 位

一湾のうすうす秋の星の数

青 森 長島 喜美

一湾のうすうす秋の星の数

弘 前 工藤乃里子

席題A 「秋の星」

◎人 位
青森 宮崎 明子

秋の星影絵のごとき山暮れて

八戸 佐々木雅翔

山小屋を底まで包み秋の星

弘前 笹原 郁子

秋の星羽黒の宿に行衣脱ぐ

八戸 佐々木ツタ子

◎秀 逸(5句)

旅の部屋みな花の名や秋の星

十和田 佐々木寿子

秋の星ひとりで見上げ二人かな

弘前 高松 遊絲

永かりし介護も終り秋の星

半島へ伸びゆく鉄路秋の星
青森 大谷 和彦
曲り屋に馬なき闇や秋の星
青森 大澤 映城

佐野ぬいの青を見終へて秋の星

弘前 坂本 幽弦

ひっそりと灯る村あり秋の星
おいらせ 野村 英利

秋の星開拓跡に井戸ひとつ

十和田 小林 五月

秋の星海峽に蝦夷横たはる
青森 古賀 雨苑

うつくしく老いなむ秋の星の下

青森 小野 寿子

夫が居て今が幸せ秋の星
むつ 畑中とほる

◎佳 作(15句)

風萎ゆる百戸の村の秋の星

青森 埴 ひさ

外つ国の子への思ひや秋の星

五所川原 三和 淑子
八戸 小野寺和子

静かなる一日の終り秋の星

青森 岡部 文子

秋の星看取りの窓に寄りくるや

弘前 対馬 迪女

農捨てし人いまいづこ秋の星

板柳 太田 鉄杉

縄文の丘へ降る如秋の星

青森 樋口 裕子

席題B 「とろろ汁」

藤木 俱子 氏 選

徳才子青良 氏 選

藤木俱子氏選

◎天 位

ははそはのははの味なりとろろ汁

弘 前 須藤 育子

◎地 位

施設より父を拝借とろろ汁

青 森 高森ましら

◎人 位

とろろ汁胡坐の中にすりつぶす

む つ 戸川美重子

◎秀 逸 (5句)

人力車見遣りつ啜るとろろ汁

青 森 蝦名 石蔵

ひとことで足りる二人やとろろ汁

弘 前 千葉 新一

一合に酔ひしと妻やとろろ汁

八 戸 西川 無行

とろろ汁店主いささか饒舌に

存うてとにもかくにもとろろ汁

つがる 石田かつら

青 森 島田よう子

とろろ汁山に張りつく家三戸

播粉木のいつもふたりでとろろ汁

青 森 小田桐和子

青 森 小野 寿子

つつましきお斎の椀のとろろ汁

◎佳 作 (15句)

逃がしたる魚は追はずとろろ播る

五所川原 三和 淑子

板 柳 太田 鉄杉

とろろ汁ベルトの穴が淋しくて

長男に横座渡してとろろ汁

五所川原 工藤登詩子

青 森 徳才子青良

変はりゆく日々を重ねてとろろ汁

癒え近きこと疑はずとろろ汁

父のこと意外と知らずとろろ汁

青 森 秋元エミ子

出番終ふ金多豆蔵とろろ汁

とろろ汁大人數の昔ふと

野辺地 後藤 瑞江

音たてて喰ふが流儀よとろろ汁

む つ 立花 夕海

注文は未練の酒ととろろ飯

弘 前 澤野 禾穎

どんぶりの最後の啜りとろろ汁

五所川原 成田みどり

黑板におすすめメニューとろろ汁

十和田 比内 順子

徳才子青良氏選

◎天 位

光るもの無き指の生涯とろろ汁

弘 前 田辺 佳子

◎地 位

とろろ汁はゴビの砂漠や掻き回す

席題B「とろろ汁」

◎人 位
 青森 橋川まもる
 アンネ読む少女のありてとろろ汁
 青森 牧 ひろし
 とろろ汁山に張りつく家三戸
 青森 小野 寿子

とろろ汁すする兜太に辿り着く
 深浦 草野 力丸
 ふるさとの名もなき寺のとろろ汁
 青森 高木 良子

◎秀 逸(5句)
 するするは好事魔多しとろろ汁
 青森 岡部 文子
 古民家の柱時計やとろろ汁
 弘前 鈴木とまと

稗飯がなにより似合ふとろろ汁
 青森 八戸 木附沢麦青
 天皇はひとつ年下とろろ汁
 弘前 十和田 日野口 晃

風がでて淋しくなりしとろろ汁
 青森 古賀 雨苑
 施設より父を拝借とろろ汁
 青森 高森ましら

摺子木にあまたの指紋とろろ汁
 弘前 花田 晶子
 考えるふりして涙のとろろ汁
 青森 斎藤 修子

父のこと意外と知らずとろろ汁
 青森 浜田しげる
 とろろ汁夫の返事は上の空
 青森 斎藤 修子

◎佳 作(15句)
 電工に午後の力のとろろ飯
 弘前 桜庭 恵
 あにおとと播鉢押さえてとろろ汁
 青森 大平恵美子

播鉢の刻み目浅しとろろ汁
 弘前 佐藤いく子
 青森の風を含ませとろろ汁
 弘前 はしもと棒

梵鐘やすり始めたるとろろ汁
 弘前 葛西 小櫻
 終生を故郷離れずとろろ汁
 弘前 八戸 田端 千鼓

拔けそうで抜けない乳歯とろろ汁
 弘前 坂本 幽弦

席題C 「葛」

小野 寿子 氏 選

木附沢麦青 氏 選

おいらせ 野村 英利 狂ふほどの才は無けれど葛燃ゆる
謎めいた人の居るはず葛館 青 森 斎藤 修子 十和田 稲場 暁子

古沼の寡黙なりしや葛明り 青 森 山口せつ子 八戸 佐々木雅翔

◎佳 作 (15句)
乙女らのチャペルの祈り葛明り 青 森 前田 良三 本丸の石垣に葛忍び入る 青 森 山本もとい

小野寿子氏選

◎天 位

葛からむ子の墓小さき一揆村

む つ 畑中とほる

葛生えし旧家の塀に歴史あり 青 森 前田 良三 放牛の砲丸めきし岳の葛 弘 前 斎藤ひでを

◎地 位

樾大樹葛に手を貸す足を貸す

弘 前 鎌田みほこ

葛の葉を添へてありけり山茶店 青 森 山本 文子 葛の字の温泉に居て葛探す 弘 前 坂本 幽弦

◎人 位

あまりにも美し過ぎる葛館

青 森 長島 喜美

ビル街の葛の庵の灯りかな 青 森 宮崎 明子 葛からむ染屋の甕に紺の艶 八戸 佐々木ツタ子

◎秀 逸 (5句)

葛すがる太宰生家の煉瓦塀

十和田 中村しおん

樾に絡む葛鬱々と暮れにけり 弘 前 葛西 栄子 ◎天 位 葛塀に沿ひつつ住宅地図たどる

葛の葉や原生林にも日の射し来

青 森 千葉 敏

葛這はず白壁にして銘酒蔵 八戸 小林 凡石 ◎地 位 青 森 蝦名 石蔵

城址の葛の中なる隠し井戸

廃校の葛に潜みし夕日影 む つ 高橋千夜湖

葛紅葉村一番の木に登る

席題C「葛」

◎人 位
つがる 石田かつら
葛紅葉博物館の白壁に
青森 千葉 禮子
湯の宿の炎上したる葛もみじ
青森 浜田しげる

葛紅葉順路をさけて登りけり
からまれてみたき葛あり触れにけり

青森 岡部 文子
弘前 高松 遊絲

◎秀 逸(5句)
古民家の蔵にからまる葛かつら

葛すがる太宰生家の煉瓦塀
黒石 稲部天津子

十和田 中村しおん
しがらみの葛諸共に紅葉す
十和田 日野口 晃

狂ふほどの才は無けれど葛燃ゆる

十和田 稲場 暁子
葛紅葉シャンソン流す喫茶店

葛紅葉次々と鬼女とびつきて
八戸 高橋 秀東

八戸 吉田 敏夫
観音の裳裾にからむ葛紅葉

本丸の石垣に葛忍び入る
八戸 山下 節子

弘前 斎藤ひでを
沈黙の廃校の壁葛絡む

葛の字の温泉に居て葛探す
十和田 金澤 京子

弘前 坂本 幽弦
団結の葛の力や蔵覆う

◎佳 作(15句)
青森 下山みのる

老松にからみからみて葛紅葉
残照に螺旋巡らす葛紅葉

弘前 桜庭 恵
十和田 杉本喜和子

十二湖に添ひ寝をしたる葛もみぢ
城壁に命綱つけ葛を刈る

深浦 草野 力丸
弘前 須藤 育子

昂ぶりを抑へきれずに葛燃ゆる
隣家よりしのび寄りくる葛かつら

鯡ヶ沢 南 美智子
弘前 畠山 容子

